雲青き

さいたま市立大成中学校　学校だより

6月号　令和7年5月30日

勝つこと負けること

校長　福田博志

５月24日（土）に体育祭を開催しました。当日は多くの保護者や学校運営協議会役員の皆様にご来校いただき感謝申し上げます。また、生徒達の競技や運営等で活躍する姿に大きな拍手を送っていただき、ありがとうございました。

個人種目や色別種目の頑張りはもちろんですが、学年種目の「玉入れ」「ハリケーン」「大縄跳び」では、クラス全員と担任の先生が心を一つに全力で頑張る姿を見せてもらいました。勝ち負けを超えて得たものがたくさんあったと思います。それは、全力を尽くした充実感であったり、仲間との絆であったり、団結した喜びであったり。また、悔しさもあるかもしれません。

ところで、競技には勝敗があります。勝つためにはどうしたらよいか、策を考え全力を尽くすところに価値があります。勝って喜び、負けて悔しがった経験は多かれ少なかれ誰もがあると思います。当たり前ですが、勝つことはうれしいことです。特に、勝つことが難しいと思う相手に対して、努力を重ね、勝運に報われた時の喜びは格別なものです。しかし、負けから学ぶことは、もっと大切なのかもしれません。

「良き敗者でなければ、良き勝者になれない」という言葉は、アカデミー賞女優の私と同年代のハル・ベリーさんが子どもの頃、お母さんから聞かされていた言葉だそうです。

私の剣道の手ぬぐいに書かれた「運鈍根（うんどんこん）」という言葉があります。物事に成功するには、「幸運にめぐり合うこと」「鈍感・鈍重と言われるほどに辛抱強いこと」「よく根気が続くこと」の三つが必要だと言われています。

私は、中学生時代からこれまで45年間、何度も勝負をしましたが、正直言って「圧倒的な負け越し」状態が続いています。でも、楽しく続けています。私のかつての部活動の教え子の中には、勝負であまり負けたことのない者もいましたが、人並み以上の努力をしているのに、いつも負けてばかりの者もいました。そんな部員には、「人生のトータルとして考えれば、勝ち負けの比率はほぼ同じになる」のだから「今日の負けは将来の貯金さ。次に勝てばいいよ。」と言い続けました。大きな声では言えませんが、それは、負けてばかりいる自分への励ましの言葉かもしれません。

引き続き、学校総合体育大会、文化部コンクール、クラブチームの大会等開催されますが、今後の豊かな人生づくりのきっかけとなってくれることを期待しています。